

# 「息子と恋人」の悲劇について

—機械文明の視点から—

杉 山 秋 雄

On the Tragedy of "Sons and Lovers"  
—From the Viewpoint of Machine Civilization—

Akio SUGIYAMA

## Abstract

David Herbert Lawrence was born at Eastwood, Nottinghamshire, on September 11, 1885. His father was an earthy miner, his mother of higher class. He was distressed by the conflicts between his parents. "Sons and Lovers" is said to be his autobiographical novel, which oozed through the real experience in his unblessed life.

The tragedy of "Sons and Lovers" arises from the difference which are not merely personal, but mainly social. 'Social' here means what is formed under machine civilization, that is, capitalism, class, morality, religion, education and so forth. It is a great convenience for mankind to have machine civilization, but he would be destructed without paying a good attention to the nature of the machine civilization. Mrs. Morel destructed by machine civilization comes to possess destructiveness, which is related to every member of her family. Every member is obliged to lead an unhappy life under her destructiveness.

In this paper, the relation between the tragedy of "Sons and Lovers" and machine civilization will be revealed.

## 1. 機械文明の破壊性について

まず機械文明が自然や人間をどのように破壊していくかをみよう。「息子と恋人」の冒頭において、ベストウッド村の変遷の過程が次のように描かれている。

'The Bottoms' succeeded to 'Hell Row'. Hell Row was a block of thatched, bulging cottages that stood by the brook side on Greenhill Lane. There lived the colliers who worked in the little gin-pits two fields away. The brook ran under the alder-trees, scarcely soiled by these small mines, whose coal was drawn to the surface by donkeys that plodded wearily in a circle round a gin. And all over the country-

side were these same pits, some of which had been worked in the time of Charles 11, the few colliers and the donkeys burrowing down like ants into the earth, making queer mounds and little black places among the corn-fields and the meadows. And the cottages of these coalminers, in blocks and pairs here and there, together with odd farms and homes of stockingers, straying over the parish, formed the village of Bestwood.

Then, some sixty years ago, a sudden change took place. The gin-pits were elbowed aside by the large mines of the financiers. The coal and iron field of

Nottinghamshire and Derbyshire was discovered. Carston, Waite and Co appeared. Amid tremendous excitement, Lord Palmerston formally opened the company's first mine at Spinney Park, on the edge of Sherwood Forest.

About this time the notorious Hell Row, which through growing old had acquired an evil reputation, was burned down, and much dirt was cleansed away.

ヘル・ロー部落からベストウッド村へ、更にノッティンガムシャーやダービシャーへと視野を広げていく遠近手法で、美しい自然の巨大感が出されている。E.M. フォスターの自然描写が思い出される。この巨大な自然の中をゆるやかに流れる小川、その傍に集まる藁葺きの家、とぼと歩きまわるロバなどがゆったりとした筆致で描かれ、村人達の静かな生活を想像させる。ところがカーston・ウェイト会社の進出で、ベストウッド村が急に姿を変える、古い家や廃棄物が焼き払われる。鉄道が敷設される。引き揚げ機のまわりをとぼと歩まわるロバに代って機械が唸る。こうした急激な変化をあわただし筆致でとらえ、読者の目をこの急激な変化に向けさせる。ベスト村への産業資本家の進出は村人達の生活に大きな影響を与える。

ローレンスは自然を愛し、機械文明を憎悪した。産業資本家の進出によって、ノッティンガムの自然が破壊されていくのをだまっていっていることができなかった。彼は作品を通して自然が人間に対していかに重要であるかを訴えていこうとした。自然に対する愛着と鋭い直観によって、生命力にあふれた美しい自然を描き出した。ローレンスを徹底的にこきおろしたT.S. エリオットでさえ彼の自然描写を賞賛している。自然と人物の一体描写となると血の交歓を感じさせるローレンス文学独特のものである。自然を美しく描いている作家は多い。例えばローレンスと同時代の作家であるハーディ(Thomas Hardy, 1840~1928)も自然描写にすぐれているが自然の美が作中人物と直接に関わりがなく、人間の営みや文明の外にあって、それ自体で独立している。ローレンスの作品における作中人物は自然の生と血の交歓を通して、宇宙と一体化して描かれている。モーレル夫妻の激しい争いの後の場面を見よう。

She became aware of something about

her. With an effort she roused herself to see what it was that penetrated her consciousness. The tall white lilies were reeling in the moonlight, and the air was charged with their perfume, as with a presence. Mrs. Morel gasped slightly in fear. She touched the big, pallid flowers on their petals, then shivered. They seemed to be stretching in the moonlight. She put her hand into one white bin: the gold scarcely showed on her fingers by moonlight. She bent down to look at the binful of yellow pollen; but it only appeared dusky. Then she drank a deep draught of the scent. It almost made her dizzy. Mrs. Morel leaned on the garden gate, looking out, and lost herself awhile. She did not know what she thought. Except for a slight feeling of sickness, and her consciousness in the child, herself melted out like scent into the shiny, pale air. After a time the child, too, melted with her in the mixing-pot of moonlight, and she rested with the hills and lilies and houses, all swum together in a kind of swoon.

夫モーレルに締め出されたモーレル夫人は自然との直接的な接触によって、夫との争いの後の興奮を和らげることができる。月光にゆれる白百合の花に指を入れ、黄金色の花粉の芳香を胸いっぱい吸い込んで、根源的な血の交歓を行ない、苦しみを忘れていく。最も心配していた子供も月光のるつぼの中に溶け込み、彼女は夜の静けさの中に、無意識の状態になって夫のもとに戻っていく。自然と作中人物との一体的調和の中に生活しようとするローレンスの姿勢がうかがわれる。

ローレンス家は何回も移住しているが、ノッティンガム地方に限られていた。両親の争いから逃れて、この美しい自然によって心を慰めた。特にムアリング貯水池とその付近の川や岡は彼の心に深く刻みこまれ、彼の想像力の温床といえる。この想像力が「息子と恋人」の中にそのまま生かされている。ローレンスは人間と自然との一体的調和の中に人間性を復活させようとする一つの目

的を持ち、この目的を実現させるために次々に作品を書いていた。従って彼の作品には文明批評的なものが多い。「息子と恋人」において、まず最初にノッティンガム地方の自然破壊のすぐ後に、モーレル夫人の悲劇が次々に取りあげられていく。これは自然破壊がただちに人間破壊につながっていることを暗示している。ローレンスは1885年から1930年までのわずか44年間でこの世を去った短命の作家であった。この時代には機械文明の破壊性に、かなり多くの作家が目向け始めていた。しかしエリオットやハックスリーなどの上流階級出身の作家と違って、炭坑夫の息子として生まれたローレンスは機械文明の弊害をまともに受けて、苦しい生活を送った。彼は社会の真相を肌で感ずることができた。

当時のイギリスの社会的背景をみよう。イギリスは世界に先がけて産業革命を遂行し、「世界の工場」と呼ばれ、機械文明の恩恵に浴した。その結果資本主義が発達し、ヴィクトリア黄金時代が出現した。イギリス史上例を見ない物質の繁栄に思いあがったイギリス人は華美な生活を送り、オックスフォードストリートやリージェントストリートは馬車が往来するきらびやかな紳士淑女で満ち溢れていた。しかしこうした物質の繁栄に浴したえたのは資本家や上流階級だけであった。アダム・スミスの‘Invisible Hand’は労働階級にまで及ぶ手ではなかった。資本家は利潤の追求に専心し、人間性を無視した。資本主義的繁栄の影には、ロンドンを中心に恐るべき貧困や頽廃が広がりつつあった。テムズ川のほとりに集まる労働者、炭坑労働者、失業者などの貧困は深まり、資本主義活動は行きづまりを見せ始めた。1881年にはマルクス主義の影響のもとに、社会民主連盟が創設され、労働運動が活発化し、遂に1886年にはトラファルガー広場に集まった失業者がリージェントストリートを往来する淑女の馬車を囲み、彼女等を引き摺り下ろして暴行を働いたり、頸飾りや指輪を奪い取るという騒動にまで発展した。「太陽の沈まぬ国大英帝国」から「沈みゆく老大国」へと変わりつつあった。このような社会状態であっても、資本家や上流階級は過去の栄華の夢に酔っていた。国内の多くの問題を抱えながら第一次世界大戦に突入した。この大戦において勝利を得たが、経済的な打撃は大きく、世界経済の中心はロンドンからニューヨークに移り、以後経済の中心はアメリカが握ることとなった。

ローレンスは妻がドイツ人であるという理由で、家宅搜索をされたり、人々から白眼視されたりしたので、第一次世界大戦中は彼にとってもっとも辛い時期であっ

た。ローレンスは「沈みゆく老大国」の中で貧困に悩まされながら社会を見つめ、根元にまで遡って社会の平和と人間の幸福を追求した。機械文明の発展によって物質の繁栄に浴したが、それによって創り出された制度や主義が自然や人間を破壊すると考えた。資本主義、階級制度、金銭至上主義、ピューリタニズムなどは機械文明の所産である。これらは重なり合って人間と人間の冷たい争いを起こさせるものである。この争いは拡大されて戦争につながる。彼は早くから戦争犠牲者や公害犠牲者の死臭をかき分け、異常なまでに現代に対する危機意識をもっていた。タイヴァートン神父はローレンスを次のように賞賛している。「彼のよくきく鼻は1マイル先の死臭をかきとることができる。」彼はよくきく鼻でモーレル家の悲劇をかきわけ、機械文明に冒されたモーレル夫人の破壊性を物語の最後まで書き続けている。機械文明によって自然が破壊されると、自然と人間との調和が失われ、人間の心は冷たくなって暖かい人間関係を保つことができなくなる。

## 2. モーレル夫人の悲劇について

モーレル夫人の悲劇は、初恋の悲劇、結婚の悲劇、長男ウィリアムの死における悲劇、モルヒネによる安楽死の悲劇というように時の流れに従ってとりあげられている。この流れにそって彼女の悲劇を見ていきたい。

### (A) 初恋の悲劇

ガートルード（後にモーレル夫人となる）は19才の頃、ジョンフィールドという金持の商人の息子と恋愛し、結婚を誓い合った。彼は商人の息子ではあったが、商売をきらって牧師になろうとしていた。彼女も厳格なピューリタンであったので、二人は聖書を通して結ばれていた。ところが、この神の使徒たるべき青年、ジョンフィールドがあっさり彼女を捨てて、財産のある年上の未亡人と結婚してしまった。彼女は彼の残した聖書を胸にいだきながら放心状態になってしまった。

彼女の初恋の悲劇の原因を考えてみよう。

ガートルードの父は造船所の主任技師という高い地位にあり、誠実さと不屈の点では誰よりも強い自信を持っていた。しかし貧しさを非常に苦にする男であった。造船所の主任技師ともなれば、かなりの収入があったはずである。ところが中産階級や上流階級の見栄と權威を維持するためには、いくらお金があっても足りないというのが当時の社会の実状であった。彼女の父も見栄と權威を維持するために金銭の追求に専心していた。当時の金

銭至上主義の犠牲者といえるだろう。ローレンスはこの金銭至上主義こそ人間を墮落させる本源であると思った。‘The Rocking-Horse Winner’の一節を見よう。

The house came to be haunted by the unspoken phrase: ‘There must be more money! There must be more money!’ The children could hear it all the time, though nobody said it aloud. They heard it at Christmas when the expensive and splendid toys filled the nursery. Behind the shining modern rocking-horse, behind the smart dolls’ house, a voice would start whispering: ‘There must be more money! ‘There must be more money!’ And the children would stop playing, to listen for a moment. They would look into each other’s eyes, to see if they had all heard. And each one saw in the eyes of the other two that they too had heard: ‘There must be more money! There must be more money!’

子供達は何不自由なく物質的には恵まれている。両親は子供達にすばらしいおもちゃを買ってあげることが、子供に対する愛であると考えている。ところが子供達はこの愛に不審をいただき、両親を冷たい目でみるようになって、金銭に非常に敏感な子供になってしまう。お金がないと誰も言わなくても、‘お金がなければならぬ’という声はすぐに聞きとってしまう。ガートルードの父の誠実さも金銭至上主義への誠実さであった。ガートルードも父に似て、誠実さと不屈の精神を身につけていたが、それらは金銭的な見せかけのものであった。

ガートルードはジョンフィールドの人間性を求めているのではなかった。彼女はこの青年にまつわる金銭や財産を求めている。彼は金持の商人の息子であり、ロンドンの大学教育も受けている。誇り高い中産階級の淑女であるガートルードの理想にはびったりである。彼女は中産階級の仮面を維持するために彼を選び、イギリスの栄華の伝統の中に生きようとした。

他方において、ジョンフィールドもまた金銭や財産に対して敏感であった。彼は商人の息子であり、しかも金銭至上主義の中心地であるロンドンの現場をふんでい

た。彼は彼女よりも金銭や財産に対しては敏感であり、自分よりも金持の娘を探し求めている。ガートルードよりも財産のある年上の未亡人の方がはるかに魅力的だった。商人と言え、金銭競争における代表的な職業であり、造船技師の娘の及ぶところでない。ガートルードはこの競争では完全に敗れ、初恋の悲劇を体験した。この体験によって人間の幸福を考えなおすべきであったが、生れた時から金銭至上主義に冒された彼女は父親譲りの誠実さと不屈の精神で金銭至上主義を目指して進んでいった。

ガートルードの悲劇の原因は彼女の性格ではなくて、機械文明であるとローレンスは主張している。機械文明によってイギリス資本主義が発達し、その目ざすものは利潤である。前述したように当時の社会では利潤追求は一種の倫理的善であると考えられていた。人々はこの倫理観に則って教育されている。ガートルードはこの倫理観に立って行動しているので、人間性よりもまず先に金銭や財産を重視する。彼女は自分の行動が間違っているとは思わない。利潤追求において勝つことが幸福への唯一の道であると信じている。ガートルードの父、ジョンフィールド、ガートルードの三人がすべて機械文明の犠牲者である。このうちガートルードが初恋の悲劇を味わい、悲劇の一生を終わるように扱われている。これは当時の女性が弱い立場にあり、その文明の破壊性は弱い立場にある者に対して強く及んでいくことを示している。ガートルードの父も、ジョンフィールドも機械文明の弊害を受けているが、主任技師になれたり、財産の獲得に成功したり、文明の恩恵に浴している面がある。しかし彼女は誤った観念を持った父に育てられて、その観念を守り続けた。その結果、ジョンフィールドとの初恋に失敗した。機械文明に冒されたジョンフィールドと父の犠牲になっているといえる。ガートルードは初恋においては受動的な立場におかれているが、モーレルとの結婚生活においては自分自身が破壊の主体となって、モーレルや子供達を苦しめ、能動的立場に立つようになる。

#### (B) 結婚の悲劇

ジョンフィールドとの恋愛に敗れたガートルードが放心状態にあった時、彼女の前に姿を現わしたのがウォーター・モーレルであった。彼は生れながらの炭坑夫であったが、彼の風貌はすばらしかった。彼の風貌についての説明を見よう。

He was well set-up, erect, and very smart. He had wavy black hair that

shone again, and a vigorous black beard that had never been shaved. His cheeks were ruddy, and his red, moist mouth was noticeable because he laughed so often and so heartily. He had that rare thing, a rich, ringing laugh. Gertrude Coppard had watched him, fascinated. He was so full of colour and animation, his voice ran so easily into comic grotesque, he was so ready and so pleasant with everybody. Her own father had a rich fund of humour, but it was satiric. This man's was different: soft, non-intellectual, warm, a kind of gambolling.

彼は堂々とした体格で、口髭をはやし、血色もよく、快活であった。彼女の父やジョンフィールドにはない魅力を持っていた。彼は大地に生きる力強い男であり、ジョンフィールドとは全く対照的であった。ウォーター・モレルの肉体からろうそくの光のように流れ出す、くすんだ金色の生命の炎の柔らかさが彼女の内奥の固いものを溶かし出した。金銭至上主義やピューリタニズムで固っていた彼女の心は溶け始め、彼の人間的魅力にひかれて、結婚した。機械文明によって冒された彼女にも根元的生命力が残っていた。太陽叢を核とする根元的生命力は一時的に働いただけで、長くは続かなかった。彼女の内奥にある固まりは溶け始めはしたが、再び固まってしまった。結婚後わずか7ヶ月にして、二人の間に大きな溝ができてしまった。彼女が家具の未払勘定書を見つけて失望する場面を見よう。

'Look here', she said at night, after he was washed and had had dinner. 'I found these in the pocket of your wedding coat. Haven't you settled the bills yet?'

'No. I haven't had a chance.'

'But you told me all was paid. I had better go into Nottingham on Saturday and settle them. I don't like sitting on another man's chairs and eating from an unpaid table.'

He did not answer.

'I can have your bank-book, can't I?'

'Tha can ha'e it, for what good it'll be to thee.'

'I thought —' she began. He had told her he had a good bit of money left over. But she realized it was no use asking questions. She sat rigid with bitterness and indignation.

.....

She said very little to her husband, but her manner had changed towards him. Something in her proud, honourable soul had crystallized out hard as rock.

モーレル夫人は家も家具も自分の財産でないことを知り全く失望してしまう。家具の未払勘定書を見つける前は、夫の手仕事の上手なことに感心して、とても幸福に思っていた彼女は急に態度を変え、夫に対して冷たくなってしまった。ローレンスはこの事件を彼等の結婚生活の最初にすえ、予想される必着の結末への出発を試みている。金銭至上主義に冒された何ものが岩のように固く結晶し、動かないものになる。これはモーレル夫人が金銭至上主義を固く守り続けていこうとする不屈の精神を示すものであり、この物語がどう流れていくかを暗示している。以後二人の関係は冷たくなり、争いはますます激化していく。モーレルの堂々とした体格も彼女の不屈の精神に打ち勝つことはできなかった。彼女には金銭至上主義や階級意識が全身に滲みこんでいる。その上厳格なピューリタンである。『職務に忠実なれ』『禁欲的なれ』というピューリタニズムの教義は、資本家の利潤追求に対して最も都合のよい教義である。彼女はピューリタンの規範をもち、この規範に従わない人に対しては極めて冷酷な態度を示した。フロム (Erich Fromm) によれば、ピューリタニズムは権威主義的宗教で、絶対的な権威あるものに対しては服従するが、ピューリタンとしての規範に達しない者を罪人扱いにする。モーレルは財産も金も教養もない。ピューリタンとしての規範には目も向けない。ピューリタンの不屈の精神で彼の精神を押さえつけ、家庭から疎外してしまう。機械文明のもとに創り出された資本主義、金銭至上主義、ピューリタニズムを黙守し、人間性を失ってしまった彼女は真の夫をもつことができない。この淋しさを子供への愛情で補おうとする。しかし子供達が成人するにつれて母の愛情に疑問をいだくようになってしまう。次の言葉は彼女の淋しさを

よく表わしている。

'I can't bear it. I could let another woman — but not her. She'd leave me no more, not a bit of room —' And immediately he hated Milliam bitterly.

'And I've never — you know, Paul — I've never had a husband — not really —'

夫を疎外した後、彼女は子供を頼りに生きようとする。息子が恋人（ミリアム）にとられてしまうような気がしてならない。何とか息子を彼女の愛の絆でしばろうとする。息子は母の愛の絆にかかって、恋愛できない。結局息子の幸福をつぶしてしまう。彼女自身はモーレルとの争いに明け暮れ、不安の毎日を送らなければならない。

ローレンスは結婚しても信頼して暖かい心で結びつかない男女は最も不幸であると考えた。モーレル夫人の結婚生活の悲劇は直接間接に機械文明の破壊性に起因するものであり、その破壊性は次から次へと波及していく。モーレル夫人は文明に冒された彼女の父やジョンフィールドの犠牲者であったが、モーレルとの結婚生活においては、自分自身が破壊性の主体となってモーレルを破壊する。

#### (C) 長男ウィリアムの死における悲劇

家庭から夫モーレルを疎外したモーレル夫人は子供に夢を託した。長男ウィリアムは母の期待をになって一生懸命努力した。彼は勉強にも、スポーツにも優れていた。母の期待は大きかった。彼はノッティンガムでは所せましと文明の中心地ロンドンにまで乗り込んで活躍することになった。彼女は息子を一流のホワイトカラーに仕立てあげることができた。ウィリアムはノッティンガム地方の紳士として近所の人々から尊敬された。モーレル夫人はウィリアムの立身出世を誇りにしていた。しかし喜んでいられたのは束の間であり、機械文明の破壊性が急速に彼に及び、モーレル夫人はロンドンでの彼の派手な生活を心配するようになる。彼女はウィリアムが自分の足でしっかり歩いていないような気がしてならなかった。ウィリアムが交際している彼女は見せかけの貴婦人であり、お金も教養もない礼儀知らずの遊び女であった。モーレル夫人はこの女を憎悪した。次の対話はモーレル夫人と次男ポールとの対話であるが、彼女の心境をくみとることができる。

'That William promised me, when he went to London, as he'd give me a pound a month. He has given me ten shillings — twice; and now I know he hasn't a farthing if I asked him. Not that I want it. Only just now you'd think he might be able to help with this ticket, which I'd never expected.'

'He earns a lot,' said Paul.

'He earns a hundred and thirty pounds. But they're all alike. They're large in promises, but it's precious little fulfilment you get.'

'He spends over fifty shillings a week on himself,' said Paul.

'And I keep this house on less than thirty,' she replied; 'And am supposed to find money for extras. But they don't care about helping you, once they've gone. He'd rather spend it on that dressed up creature.'

'She should have her own money, if she's so grand,' said Paul.

'She should, but she hasn't. I asked him. I wonder whoever bought me a gold bangle.'

ウィリアムはロンドンに出かける時、毎月1ポンドずつ送金すると母に約束したが、10シリングずつ二回送金しただけで、その後は一ペニーも残らずに収入の全部を費してしまった。この対話は次男ポールが就職して定期代がなくて困っている時の対話である。ウィリアムは自分の家の生活が苦しいことを知りながら、フラッパの娘に金の腕輪を買ってあげたりして、派手な生活を送っている。上流階級の紳士の生活をまねようとするれば、どんなに収入があっても、お金は一ペニーも残らないだろう。ウィリアムは立派な服装をして、金の腕輪をつけたロングドレスの娘と遊び歩くことを悪いとは思っていない。立派な服装をして、派出な娘をつれていくことは上流階級の一つの条件でもある。また母の理想に従って歩いていることにもなる。

モーレル夫人の心の中は複雑である。ウィリアムが立派な服装をして、ロングドレスの娘をつれてオックスフ



ォードやリージェントストリートで、上流階級の紳士と交際できるようになったことは彼女の夢が実現されたことを意味する。彼女の最も大きな喜びである。しかし夫を疎外した彼女の現実の貧しい生活とウィリアムの派手な生活との間にはあまりにも大きなずれがあり、何となく矛盾を感じる。彼女に対しては金の腕輪などを買ってくれる男はいなかったし、また現在も夫がいないのと同じようになっている自分をみじめに思っている。ウィリアムがフラッパの娘に夢中になって母を捨ててしまうのではないかと心配している。彼女は自分の夢は達成できたが、心の中は矛盾、心配、惨さが往来し、幸福にはなれなかった。

ウィリアムはジプシー娘のリリー嬢を連れて家に帰るが、モーレル夫人は気に入らなかった。このジプシー娘は自分をもてなしてくれるモーレル家の人々に威張りちらし、妹のアニーなどは女中扱いされてしまった。モーレル婦人は心配してウィリアムに忠告するが、彼はあきらめようとしなかった。ウィリアムはベスト村に帰れば、この村出身の唯一人の紳士であり、村人達の尊敬の的になっていた。彼は本当に紳士になった気持になって、ジプシー娘をつれてピカデリーを遊び歩いた。このジプシー娘はメリメの小説におけるカルメンのような女で、金遣いがあらくて威張りちらした。次はウィリアムがリリーについて母に真相を打ちあける場面である。

‘You know, mother,’ he said, when he was alone with her at night, ‘she’s no idea of money, she’s so wessel-brained. When she’s paid, she’ll suddenly buy such rot as marrons glacés, and then I have to buy her season-ticket, and her extras, even her underclothing. And she wants to get married, and I think myself we might as well get next year. But at this rate —’

‘A fine mess of a marriage it would be,’ replied his mother. ‘I should consider it again, my boy.’

‘Oh, well, I’ve gone too far to break off now,’ he said, ‘and so I shall get married as soon as I can.’

‘Very well, my boy. If you will, you will, and there’s no stopping you; and I

tell you, I can’t sleep when I think about it.’

リリーは給料をもらうとマロンガラスのようなつまらないものを買ってしまって、下着まで買ってあげなければならない。カルメンが最高の菓子を買いしめる女であるのと似ている。カルメンのような娘と結婚したら大変なことになると母は心配で眠ることができなくなってしまう。母の心配はウィリアムに会うたびに深まっていた。10月の家經市の日に帰って来た時も、ウィリアムのやつれた顔を見て非常に心配した。ウィリアムはこの時自分の生活が行きづまり、自分の死が近いことを予知していた。彼はリリーと派手な生活を送るが、夜は遅くまでラテン語やフランス語などを勉強していた。より高級なホワイトカラーになって収入をふやそうとした。モーレル夫人はウィリアムが何かの犠牲になってしまうような気がしてならなかった。

It was sunny October weather. He seemed wild with joy, like a schoolboy escaped; then again he was silent and reserved. He was more gaunt than ever, and there was a haggard look in his eyes.

‘You are doing too much,’ said his mother to him.

He was doing extra work, trying to make some money to marry on, he said. He only talked to his mother once on the Saturday night; then he was sad and tender about his beloved.

‘And yet, you know, mother, for all that, if I died she’d be broken-hearted for two months, and then she’d start to forget me. You’d see, she’d never come here to look at my grave, not even once.’

‘Why, William,’ said his mother, ‘you’re not going to die, so why talk about it?’

‘But whether or not—’ he replied.

‘And she can’t help it. She is like that, and if you choose her—well, you can’t grumble,’ said his mother.

On the Sunday morning, as he was put-

ting his collar on:

'Look,' he said to his mother, holding up his chin, 'What a rash my collar's made under my chin!'

Just at the junction of chin and throat was a big red inflammation.

'It ought not to do that,' said his mother. 'Here, put a bit of this soothing ointment on. You should wear different collars.'

He went away on Sunday midnight, seeming better and more solid for his two days at home.

『ウィリアムは学校を逃げ出した少年のように』とあるが、これは上流階級の紳士になるための母の学校から逃げ出すことを意味している。彼は母の教育を守って進んできたが、無意識のうちに母の絆から逃げ出そうとしている。『もしぼくが死んだら、ジプシー（リリー）は二ヶ月間はがっかりしているだろうが、お母さんはぼくのお墓へ一度だって来ないでしょう。』という言葉と考えると、母の学校から逃げ出すことはウィリアムにとってかなり困難なことであり、死の決意をしている。同時にウィリアムは母の愛が偽の愛であったことに気がつき、母の学校から逃げ出した自分をあっさり捨て去るような気がしてならなかった。彼は不安な毎日を送るが、遂にカラーずれが原因で、あっけなくこの世を去ることになる。モーレル夫人はカラーにアイロンをかけるのが好きで、カラーが輝き出すまでシューシューと押さえつけるのだった。アイロンのきいたカラーは紳士の象徴である。モーレル夫人はウィリアムをホワイトカラーに仕立てあげようと努力してきたのだが、このカラーによってウィリアムの生命が奪われてしまう。『見て、ぼくの顎の下にカラーずれができてますよ。』と言って母に見せるが、母は軽く受けとめて軟膏を渡す。この傷は浅く見えたが、機械文明の破壊性がしみ込んだ深い傷であった。この傷のところから顔じゅうに丹毒が広がり、脳にまでまわって死んでしまった。

モーレル夫人はウィリアムを文明の戦士としてロンドンにまで送り込んだが、彼女の夢は挫折してしまった。彼女は生きる夢がなくなってしまった。イギリスの伝統を黙守する女の悲劇である。

#### (D) モルヒネによる安楽死の悲劇

モーレル夫人が長男ウィリアムの死に直面して、生きる望みを失ない、抜け殻のようになってしまった。この時次男ポールが肺炎になってしまった。彼女は死んだ者より生きている者の方が大切であると自分に言い聞かせ、ポールの看病に専心した。彼女の献身的努力により、ポールは回復した。以後彼女はポールを頼りにして生きようとし、ウィリアムのはたせなかった夢をポールに実現させようとした。ウィリアムを死に追いやったモーレル夫人は中産階級への夢を絶対に捨てなかった。次の議論を見よう。

'You know,' he said to his mother, 'I don't want to belong to the well-to-do middle class. I like my common people best. I belong to the common people.'

'But if anyone else said so, my son, wouldn't you be in a tear. You know you consider yourself equal to any gentleman.'

'In myself,' he answered, 'not in my class or my education or my manners. But in myself I am.'

'Very well, then. Then why talk about the common people?'

'Because—the difference between people isn't in their class, but in themselves. Only from the middle classes one gets ideas, and form the common people — life itself, warmth. You feel their hates and loves.'

'It's all very well, my boy. But, then, why don't you go and talk to your father's pals?'

'But they're rather different.'

'Not at all. They're the common people. After all, whom do you mix with now — among the common people? Those that exchange ideas, like the middle classes. The rest don't interest you.'

'But — there's the life—'

'I don't believe there's a lot more life from Miriam than you could get from any



educated girl — say Miss Moreton. It is you who are snobbish about class.'

She frankly wanted him to climb into the middle class, a thing not very difficult, she knew. And she wanted him in the end to marry a lady.

ポールは中産階級の間人になることを望まず、庶民のままでいたいと思っている。これに対し母はポールが積極的に中産階級の中に入り込んでいくことを望んでいる。人間の価値基準の求め方が違っている。ポールは人間の価値基準を真実の生に求め、母は教育や階級に求めている。母の考え方は何回もの悲劇を経験しているにもかかわらず、一向に変わっていない。ポールは長男ウィリアムのように簡単に母の犠牲になる息子ではなかった。長男ウィリアムはモーレル夫妻が比較的平和に生活していた時に結ばれた子供であったが、次男ポールは夫婦喧嘩の最も激しかった時の子供である。彼は母の胎内にいる時から両親の争いを全身で体験してこの世に生まれ出ている。両親の争いの原因が何であるかを赤ん坊の時から嗅ぎわけていたのであろう。親子の愛は人一倍強く感ずるポールではあったが、父を破壊し、兄を破壊した母の破壊性に対して根強く抵抗した。母はポールと議論するたびに疲れを感じ、体力が弱まっていくような気がした。

モーレル夫人は中産階級の仮面を維持するためにどこまでも頑張り続けようとするが、文明病とも言われる癌になってしまった。ポールとアニーが看病にあたるが、モルヒネを飲ませて母を死に追いやってしまった。彼等がモルヒネを飲ませる場面をみよう。

She was reared up in bed, and he put the feeding-cup between her lips that we would have died to save from any hurt. She took a sip, then put the spout of the cup away and looked at him with her dark, wondering eyes. He looked at her.

'Oh, it is bitter, Paul!' She said, making a little grimace.

'It's a new sleeping draught the doctor gave me for you,' he said. 'He thought it wouldn't leave you in such a state in the

morning.'

'And I hope it won't,' she said, like a child.

She drank some more of the milk.

'But it is horrid!' she said.

He saw her frail fingers over the cup, her lips making a little move.

'I know—I tasted it,' he said. 'But I'll give you some clean milk afterwards.'

'I think so,' she said, and she went on with the draught. She was obedient to him like a child. He wondered if she knew. He saw her poor wasted throat moving as she drank with difficulty. Then he ran downstairs for more milk. There were no grains in the bottom of the cup.

ポールは母を救うためなら、自分が死んでもいいと思うほど母を愛しているが、反面においては母の破壊性を憎悪している。ウィリアムやポールは幼少の頃は母の意のままに動いてきたが、逆に母が子供達に従順になり、彼等の意のままに動かされることになった。身心ともに機械文明に冒されたモーレル夫人は子供のようになり、モルヒネを全部飲んでしまった。モルヒネによって母を楽にさせてあげようという気持もあっただろうが、次の場面を見ると母から早く解放されたいという気持が強く働いていたことがわかる。

The breathing came still, but he was almost used to it. He could see her. She was just the same. He wondered if he piled heavy clothes on top of her it would make it heavier and the horrible breathing would stop. He looked at her. That was not her — not her a bit. If he piled the blanket and heavy coats on her—

モルヒネを飲ませてもまだ息をひきとらず、苦しい息づかいをしている母をみて、彼は重い衣類や毛布を積みあげたらと思うのであるが、これはかなり残酷である。彼は身心ともに文明に冒された母を真の母とは認めず、単なる破壊人間と思うようになったからである。

真実の人間の生を求めて生きようとしなない女の悲劇である。献身的な努力をはらって育てあげたポールに殺されるとは夢にも思わなかっただろう。ローレンスは盲目的に機械文明の灯を求める者の悲劇を小説化し、人々に真の生き方を暗示している。

## 結 び

‘息子と恋人’において機械文明の破壊性が人間社会に強く影響し、モーレル夫人の一生を悲劇に終らせている。高度の機械文明のもとに成長した資本主義、金銭至上主義、階級制度などは人間にとって乗り越えることができない非情なものであるだろうか。ローレンスはそう思っていない。モーレル夫人の悲劇は盲目的に機械文明の灯を求めて進んでいくところに原因がある。従って資本家対労働者とか階級闘争とかを主題にしているのではない。労働者階級から中産階級へ、中産階級から上流階級へと階級間の移動は自由に行われる。ウィリアムも比較的簡単に中産階級の紳士に移っている。プロレタリア小説のように社会における階級を固定させていない。ローレンスは個人の社会への、そしてまた機械文明への関わり方を問題にしている。モーレル夫人の中産階級への執着心：ポールの労働階級への執着心：これらは個人の生き方が自由に選択されていることを示している。ローレンスは機械文明の破壊性も社会の非情も、個人の努力によって克服できる可能性を与える。ディケンズのように社会は非情なものであって動かすことができないというように考えているのではない。彼は個人の自我を尊重し、太陽叢にもとづく人間性の復活を主張している。太陽叢から発する磁気波を通して、人間対人間、人間対自然の暖かい関係を取りもどこうとする。過去の固い殻にとじこもってはならない。ローレンスはヘラクレイトスのように万物流転論者であり、万物の停滞を認めない。万物流転の中で人間が先頭に立って進まなければならない。機械文明も時代と共に進歩するのは当然であり、またそうでなければならない。人間はこの機械の歯車になるのではなく、もっと先に進んでいかなければならない。文明の進歩と共にきらびやかなロングドレスも燕尾服も生産されるが、どういう心で人間がこれらを身につけるかが問題である。これらが他人を軽蔑する手段となってはならない。どんな服を着ようと自由である。自分自身がよく考えて、姿を変えていくことはむしろローレンスの望むところである。同じ炭素であっても、石炭に姿を変えることもあるし、ダイヤモンドに姿を変えることもある。同じ人間であっても炭坑夫に姿を変えること

もあるし、ホワイトカラーに姿を変えることもある。モーレル夫人のように中産階級の仮面を維持するために帽子をかぶってはならない。個人が自分自身の個性を伸ばすために姿を変えていかなければならない。

機械文明の破壊性とは言っても、それ自身が自然や人間を破壊することはない。最終的に機械を動かすものは人間であり、人間が破壊していることになる。機械文明のもとでどう生きるかが問題である。ローレンスは人間が本来の姿にもどって人間性を復活させなければならないと主張している。彼は人間の根元にまで遡って、太陽叢理論を考え出した。この理論において、四根元中枢の健全なる発達により人間性が復活されることを科学的に立証している。T.S. エリオットのように、人間は原罪を背負った不完全なもの、本質的に悪しき存在であって、倫理的かつ政治的秩序の規律によらなければ、何も価値あることをなしとげることができないというように考えているのではなく、ローレンスは倫理的かつ政治的秩序の規律を否定し、人間本来の血と肉の暖さによって人間と人間とが、そしてまた人間と自然とが結ばれていくところに幸福があると信じた。また彼は人間が本質的に悪しき存在であるというのではなく、人間は生れながらにして太陽叢を持ち、‘我は我なり’というはっきりした意識があり、本来血の通った暖かい存在であると主張している。人間本来の暖かさは一生続くものと思われる。モーレル夫人が金銭至上主義やヒューリタニズムの虜にされ、夫や子供達を不幸に追い込んでいくが、その過程において人間としての暖かさがしばしばとりあげられている。ローレンスは血と肉の暖さに背を向け、文明の灯を求めて進む人々の悲劇を小説化し、人間性復活を叫んだのである。

## 参 考 文 献

- A) ローレンスの作品
  - 1) D.H. Lawrence: Sons and Lovers. (Heineman, 1955)  
(本論文の引用文献はすべてこの書による)
  - 2) D.H. Lawrence: Lady Chatterley's Lover. (Heineman, 1956)
  - 3) D.H. Lawrence: Psychoanalysis and the Unconscious. Fantasia of the Unconscious. (Viking, 1960)
  - 4) D.H. Lawrence: Apocalypse. (Heineman, 1972)
  - 5) D.H. Lawrence: The Rocking-Horse Winner & The Prince (edited with notes by Tadashi Mikami, Taitosha)

B) 批評書その他

- 1) Edward D. McDonald: A Bibliography of the Writings of D.H. Lawrence. (The Centaur Book Shop, 1925)
- 2) F.R. Leavis: D.H. Lawrence. (The Minority Press, 1930)
- 3) Lohn Middleton Murry: D.H. Lawrence. (The Minority Press, 1930)
- 4) Mark Spilka: The Love Ethics of D.H. Lawrence. (Indian Univ. Press, 1955)
- 5) William Tiverton: D.H. Lawrence and Human Existence. (Philosophical Library, 1951)
- 6) T.S. Eliot: After Strange Gods. (Faber and Faber, 1934)
- 7) Graham Hough: The Dark Sun. (Gerald Duckworth, 1956)
- 8) Mary Freeman: D.H. Lawrence; Basic Study of His Ideas. (Univ. of Florida Press, 1955)
- 9) George Sampson: The Concise Cambridge History of English Literature. (Cambridge Univ. Press)
- 10) E.M. Foster: Aspects of the Novel. (E. Arnold, 1969)
- 11) W.J. Harvey: The Art of George Eliot. (Chatto & Windus, 1961)
- 12) A. Huxley: The Letters of D.H. Lawrence. (Heinemann, 1956)
- 13) 鉄村春生: D.H. ローレンスの文学 (あぼろん社 1976)
- 14) 阿部知二: ローレンス研究 (英宝社 1975)
- 15) 北沢滋久: D.H. ローレンス (墨水書房 1973)
- 16) 倉持三郎: D.H. ローレンス (英潮社 1977)